

山形大学附属博物館報 8

目 次

三浦新七博士と附属博物館	(1)
博物館の思い出	(2)
博物館にかける夢	(3)
個から群への充実を	(4)
お知らせ	(5)
資料紹介—紅花—	(6)

三浦新七博士と附属博物館

館長 川 副 武 胤

元館長の長井政太郎博士が本誌2号(1975、2)に寄せられた「郷土博物館成立の思い出」は、本館成立の沿革史であるが、これを読むと、この小博物館といえども、ローマは一日にして成らずの感が深い。

館藏品は購入と寄贈。これに寄託品が加わるが、「類は友を以て集る」「桃李不言、下自成蹊」のたとえの通り、蒐集の実績のない所に寄贈は受けられない。本館の購入蒐集の実績は本学(その前身＝山形師範学校－山形高等学校)の職員関係者の努力によるものであった。また、本館の前身師範学校郷土室だけでなく、西村山郡郷土博物館(寒河江慈恩寺等の発掘品を中心とする)を引継いだ県教育会経営の郷土研究博物館が、戦時の特殊事情から郷土室に合併されたことも、願れば本館の拡充に大きな寄与をなしたことになった。この関係者も実は本学前身学校の職員であったが、その中で特に忘れることのできないのは、上記郷土室博物館と平行して昭和3年に、創立された山形県郷土研究会の会長としてこれを主宰された当時の山形高等学校講師三浦新七博士のことである。

博士は明治10年、市内旅籠町に生れ、山形尋常中学校卒業後東京(高等)学校に入り、明治32年卒業、更に専攻科卒業後同35年同校講師、同年欧州に留学、爾後10年主としてドイツに滞留、ライプチヒ、ミュンヘン、ベルリンに遊学、歴史学者ランプレヒトに師事し、他にリップス、ブレンターノ、ジンメル、シュモラーその他の講筵に列し、歴史学者ウェデマイヤーとも親交があった。

明治44年帰朝、母校(のち東京商大、一橋大となる)教授となり、大正14年郷里の山形高等学校講師を兼ねたが、昭和2年商大を辞して郷里へ帰り、やがて両羽銀行頭取(昭和4年)に就任した。その後も引き続き山形高等学校の教鞭をとり、昭和10年まで続いた。この間、昭和3年2月有志によって上記山形県郷土研究会が創立され

ると、その会長としてこれを主催した。

爾来当地方に関する諸分野の研究、史蹟踏査、発掘(本橋出羽櫓など)、郷土博物館と連合しての展覧会、公開講演(初期のそれには会長 三浦新七・東北大・京大講師 長田貞吉・山形師範学校和田兼三郎・山形県庁五十嵐清蔵等の名がみえるし、柳田国男・西村眞次・黒板勝美博士等もまねかれたようである。)・研究成果の刊行(郷土研究叢書。昭和17年第11輯まで、郷土研究資料 第2輯まで)の刊行等を行った。

三浦博士が私財を投じて購入・蒐集された典籍、文書・文物は膨大なものがある。初期に個人で蒐集された図書は大正12年の震災で烏有に帰したが、その後蒐められたものだけでも洋書3万冊、和漢書1万2千冊に達するといわれ、いずれも母校東京商大に寄贈、現在その後身一橋大学図書館が保管している。

一方山形師範学校郷土室の蒐集品は、昭和6年文部省からの計6,600円の購入費によるものを基幹とするが、三浦博士は、これに加えて積極的に古記録・古文書ほか文物の蒐集につとめた。その資料蒐集には貴重品の県外流出を防ぐ意味もあって、継続的に莫大な私財を投ぜられたときいている。

本館が引きついだ西村山郡郷土博物館時代の蒐集品をはじめ本館に寄託せられて名を附せられている三浦文庫文書、羽黒鏡、十字架(かくれ切支丹使用)等はその一部である。

また博士の主宰した郷土研究会から幾多の学者が輩出した。当初から関係した安斎徹・橋本賢助・阿部正巳氏のほか、長井政太郎・川崎浩良氏等は本研究会の存在によって、学者としての成長を遂げられたのである。

従って三浦博士は本学(前身)に公には講師として約10年間教鞭をとられただけであるが、本学、とくに本博物館にとっては、上記の通り忘れることのできない恩人であるといつてよい。

博士の本領は、勿論上記郷土資料の蒐集、郷土研究の

推進にとどまらなかった。博士の学問の真骨頂はその博大な視野にかかる文明史、精神史論にあり、その視野の及ぶところ古代ユダヤ・ギリシャ・ローマ・中世ヨーロッパ・近世・近代ヨーロッパからインド・古代・中世シナ・日本(一橋大学図書館明治文庫をみよ)即ち地球上の全地域、全時代の文明を網羅している。しかしその成果の活字化されたものは僅かに博士の没後刊行された「東西文明史論考」ただ一冊があるに過ぎない。博士の東京商大、小樽商大、山形高等学校等における、その年度々々の講義によって、幾多の学者・経済人・政治家が育っていったけれども、その記録はペンや鉛筆書きのまま、1万枚余のノート・メモとして一橋図書館に保管され、後学の就いて学ぶのを待っている。本博物館の受けた恩恵を思い、その博大深遠な学理を垣間みて次第に全貌に近づけば近づく程、博士の遺稿について学びたい想を抑えることができない。

それと同時に本博物館ばかりでなく、博物館運営の基本にかかる蒐集・調査・研究・公開・関連講座開設という、その理念と具体化についても、ちょうど現在わが博物館がようやくその緒につき、或は将来に志向する方針に對置して見て、博士の事業が遠くその先蹤をなしていることを想えば、改めて博士の偉大さを思わざるを得ないのである。

博物館の思い出

土屋 功 位

海外に出て暇があると博物館に出かけるケースが多い。ロッキー山脈を越えサスカツーンに着くと、一望千里の広大な小麦畑が広がる。しかしこの大平原も、僅か100年前はインディアンと野牛の天下であった。The Western Development Museum はこの大平原を開拓した人達を記念するためのもので、当時の機械器具や家具などを配列し、開拓者達の勇気、頑張り、達成への手向けにしているようだ。スチームエンジンで動く鉄輪トラクタなどの大型機械は、戸外に並んでいるというより放置されてある。筆者は農業機械学専攻だけに、これらに興味を引かれた。

この州は東西南北に、直線道路が10km間隔で走っている。南北でも500km位ある。道路に囲まれた1区画は1万haで、そこには10~20戸の小麦作農家だけという巨大農業地域である。このような農業を築き上げるまでの苦勞がよく偲ばれる思いであった。

デトロイト市には The Henry Ford Museum があつる。床面積は14エーカーで、開拓時代から今日までのあらゆる品物、生活用具から農機具、消防ポンプ、自動車、バードによる南極横断の飛行機までである。正面の巨大な建物はフィラデルフィアの独立記念館、議会場および昔の市役所を再建したものである。農機具の量も莫大で、

何十台のトラクタ、何十台の馬車、数知れないブラウなどが作業機別に整然と並べられてある。日本では折角集めた農機具を並べるスペースがなく、どこでも困り切っているのとは格段の差である。

この博物館を見学して、欧米人の博物館に対する考え方、大資産家の名前を冠した博物館のあり方などを学んだ。

ニューヨーク市では The Solomon R. Guggenheim Museum, Whitney Museum of American Art,そして世界屈指の The Metropolitan Museum of Art. に入ったが、通りすがりに立寄った程度のため殆んど印象に残っていない。折角の機会も、事前の知識がなくてはあまり役に立たない例である。

スウェーデンやデンマークでは昔の宮殿や王城を参観し、いい物は皆王様に集められてしまうものだという実感をもった。また最高傑作の絵画とは、天井や壁に画かれたものではないかと思ったりした。この感慨はベルサイユ宮殿その他を参観するに及んでいよいよ強まった。

ロンドンの The British Museum は世界最大の博物館とか。大英帝国全盛の頃、しかも一般の関心がまだ低い頃、世界中から集めたものだけに、正に各地域、各時代の最高級品が揃っている。中近東の大彫刻や遺品などの前では、圧倒されるような思いがする。年中無料で、館内ではいろいろな講義も行われている。

かつて大英帝国は相手の無知につけ込み、強引に持ち出したという見方もある。しかし英国が集めなかったとしたら、その後の世界情勢から、これらの大部分はどこかに散逸してしまったと思われる。むしろ今では、ロンドン市(或いは英国)はこれらの貴重な財宝の番人の役目を果していると思つた方がよいのかも知れない。

パリ市の Musée du Louvre では、私が訪れた頃はモナ・リザの画も手の届く所に無雑作に掛けてあり、これが昔から評判の名画の実物かと思つたりした。またミロのビーナス像も館内通路の交差点にあり、誰でも自由に手を触れられる。その後東京で公開された時の騒ぎや嚴重な警戒振りをニュースで見聞するにつけ、所が変ればこうも変わるものかと思つたりした。それにしてもさすがに大した博物館である。

また Musées Nationaux では、年代順に並べられたピカソの画を沢山見た。中には何となく分る気のする大作もあったが、大部分は私の理解の範囲を越えるものであった。ただしこれほどのピカソの作品群に包まれると、それなりの感じを味わうことができた。

イタリアではローマ、ミラノ、ベネチア、ナポリなどでいろいろな博物館を訪ねたが、フィレンツェ市の印象が一番強く残っている。ベッキオ宮殿やウフィツィ宮殿にはルネサンス美術の粋が集めてある。ドウモを始めいろいろな寺院が皆博物館の役目を果している。むしろ街中が博物館で、シニョーリア広場を中心に、どんな露地にも“芸術”が漂っている。機会があればまた訪ねたい街で

ある。

ミュンヘン市の Deutsches Museum は、自然科学と工業および工芸技術に関する博物館として世界一の規模と設備をもっているそうだが、さすがに広い。何でもある。しかし明確な目的なしにただ漫然と入ると、限られた時間ではほとんど印象に残らない結果になる。

これに比べると各地の小さな博物館、例えばフランクフルト市の Goethehaus は当時の上流階級の住宅ではあるが、小ちんまりしていて親しみ易い。

東欧各国でもいろいろな博物館を訪れたが、それぞれの印象は前述のどれかに含まれる。

台北市の故宮博物院には貴重な芸術品や文献など24万点が収蔵されているそうだが、広大な国土と5000年の歴史から生れた中国文化の粋だけに、さすがに素晴らしいの一語につきる。一方、北京市の故宮博物院は旧紫禁城内にあるが、こちらは壮大な建物群に圧倒されて、歴代の芸術品の宝物は霞んでしまっている感じがした。

成都市の杜甫草堂は、広い敷地内に美しい竹叢が散在している。ここには彼の詩集その他があるので、漢詩に興味のある人は必見の所であろう。

古代の韓国と日本は密接な繋がりを持っていたので、百濟王朝の古都、公州や扶餘、新羅王朝の古都、慶州の博物館では、収蔵されている文物ばかりでなく、静かな田園風景に包まれた周囲の環境に深い親しみを覚えた。東南亜およびオセアニアでは、メルボルン市の西北にあるバララット市の「金塊復元町」やジョクジャカルタ市のサルタン宮殿などが思い出される。

所で上野の森には国立博物館がある。筆者も列車時間までの暇つぶしに時々入館するがいつも空いている。各地の神社や寺院では宝物拝観料がとられるが、国立博物館では僅かな入場料で貴重な国宝類がいくらかも見られる。また県内にもいろいろな博物館や資料館などが、地域の特色あるものを収蔵している。遠くの神様ばかりが尊いのではない。身近な所にも教えられるものが少なくない。まず本学の博物館から始めよとお奨めしたい。

(農学部教授・博物館運営委員会委員)

博物館にかける夢

後藤 晃

町を訪ねた時、時間が許すならばその博物館を訪ねることを習としていた。この5月末、函館に行く機会を得た。学界の研究発表の場を中座して、市立博物館を訪ねた。中世の館跡から出土した40万枚に近い銅銭がここにあると聞いていた。博物館は特別展を開催していて目的の古銭は展示されてはいなかったが、学芸員の方の御好意でその一部を特にもせてもらった。我が国の最古の銅銭である和銅開珎や漢代から明代までの中国銭、さらには西夏(チベット系の国家)や安南(ベトナム)の銭などが含まれる膨大な量の銭なのである。14・5世紀

の北海道の地に、このような広範囲のしかも多量の銭が流通していた事実を知らされ、一つ勉強になった。これが博物館を訪ねる楽しみなのである。

日本の町だけでなく、外国の町でも博物館を訪ねる。生れて初めて踏んだ外国の地は戦時下のサイゴンであった。1970年のことである。空港に銀行はなく、タクシーもなく、迎えてくれる人もなく、苦勞して市内に入ったのは忘れえぬことである。数日後、博物館には文化省の職員の方に案内されて訪れた。午前と午後、色が異なるアオザイに着がえるおしゃれなお嬢さんであった。サイゴン市やコーチナともよばれたその周辺は今ではヴェトナム人の土地である。しかし、そうなのはここ3〜400年のことにすぎない。それ以前は、ここはクメール人(カンボジア人)の土地であった。またチャム人の土地であった時代もある。チャム人は今日では国をもたない。サイゴンやカンボジアのプノンペンで、あれがチャム人だよと案内人の人に教わった。両国にまたがる少数民族でイスラム教徒である。サイゴンの、南国の木々の緑と紅の花にかこまれた博物館はコーチナのそのような歴史を教えてくれた。

博物館は、特定の地域の歴史を語ってくれる。一つの地域に一つの民族・文化が連続している我が国の歴史は、世界的には珍しい例なのである。支配者が、あるいは住民までも、めくるめく変るのが一般である。その典型の一つがエジプトである。その首都カイロを訪れたのは1975年の冬であった。そこにある国立博物館は上野にある国立博物館と同程度の大きさであろうか。ただ、カイロのそれは、めいっばい展示している。展示物の量は上野の何倍かになるに違いない。今日から4600年前に、あの巨大なピラミッドを造った世界最古の国なのだから、展示物に不足はなく、建物からあふれんばかりであった。しかし、ピラミッドを造った人々の言葉や文字は今日のエジプトにはない。ハム系のその言語使用者はセム系のアッシリア人に征服された。次いでインド・ヨーロッパ系のペルシア人とギリシア人がこの地の支配者であった。ヘレニズム時代のギリシア語による文化はエジプトのアレクサンドリアを中心としていたのである。次のローマ帝国の支配時代、この地の住民の大部分はキリスト教徒となり、古代の精神は消えうせた。次にアラブ人がイスラム教とアラビア語をもってこの地に來た。13世紀からはトルコ語使用者がこの地の支配者となり、第一次世界大戦までエジプトの官廷用語はトルコ語であった。現代のエジプトは、アラブ文化のルネッサンス(復興)の時代であると、この国の歴史家は規定している。カイロの博物館はそのような歴史の証言者なのである。ツタンカーメンの黄金のマスクとギリシアの彫像とアラブの細密画が、エジプトのものとして、共に展示されている。

さて、山形大学附属博物館はどのような歴史の証言者であるのだろうか。附属「郷土」博物館から「郷土」の二字を削ったのは、現館長川副教授をはじめ関係諸先生

の英断であった。この博物館は山形という郷土だけの歴史の証言者であってはならぬ、とのおもいがこの判断の基になっているものと推察している。博物館は、何よりも、山形大学での研究・教育の歴史の証言者であるべきだろう。研究・教育は、大学がある山形と深くかわってはいても、その枠にとどまらず、広く全世界を相手にするものに他ならない。そのような研究・教育の歴史の証言者が、山形大学の附属博物館であってほしいと思う。

博物館が大学の一部であるならば、博物館が研究・教育の歴史の創造者をも兼ねてよいはずだ。例えば山形という土地とそこでの人間の生活を、エジプトの農業県とそこでの人間の生活と比較研究をする。農学をはじめとして法律・経済・政治・社会などの社会科学、歴史などの人文科学、動植物、地質などの理学、風土病などで医学、その他諸々の領域の科学の学際的な研究として、このような総合的な研究を組織する場として博物館ほどふさわしいものはない。そしてこのような学際的な研究の対象は無限にあって、我々を待っている。博物館にける夢は大きい、存外、これは現実的な夢なのである。

(人文学部助教授・博物館運営委員会委員)

「個から群への充実を」

伊 藤 健 雄

博物館に展示・保存されている動植物標本は、われわれにきわめて多くのことを語りかけてくれる。それは、単に、かつて「生きていた」という証し以上の意味を、われわれに伝えてくれる。

多くの標本の集積がいかに大切なことかは、わたし自身もこれまで幾度か経験してきた。

こんな出来事があった。小中学校の夏休みが間もなく終わろうとしている8月の或る日、研究室に1人の中学生が訪ねてきた。休み中に家族旅行で海へ行き、その時に採集した海岸の動物のなかに、どうしても名前が調べられない貝があったので持ってきたのだという。その中学生は、小さいときから貝を集めるのが大好きで、中学生の域をはるかに越えた、高度な知識を持っていることが、その話しぶりから充分にうかがえた。

遠慮がちに差し出されたその貝を、わたしは手に取って眺めてみた。それは、殻長が2センチほどの楕円形をした扁平なカサガイの仲間で、すこし前方へずれた殻頂から放射筋がのび、暗緑色の不規則な斑紋が殻の表面にたくさん入っていた。どうみても、かつて、カスリアオガイとかクサイロアオガイとかの名前で呼ばれていたコウダカアオガイ(ゆきのかさ科)に間違いなかった。この貝は、岩礁や転石海岸でふつうに見かける貝であるが、殻表の色や模様の変異が多く、われわれを悩ませてきたものであった。

そのことを中学生に話したところ、すぐに次のような答が返ってきた。

「いろいろな図鑑を調べて、僕もアオガイの仲間じゃないかと思ったんです。でも、殻の内側の色が図鑑に書いてある色と全然違うので、わからなくなってしまったんです。」

そう言われて、わたしは改めて殻の内面を見直してみた。内面は一樣に濃褐色で、周縁だけが黒斑列になっていた。因みに、図鑑の記載には、殻内面の色は乳青色で、殻頂部のみ褐色を呈するものもある、とある。

わたしは、コウダカアオガイで間違いはないと思うが、内面の色の違いについてももっと調べてみてからはっきりした答を出したい、と返事をし、中学生の連絡先を聞いてから帰ってもらった。

この疑問は、翌年の夏に解決した。臨海実習の際、実験所近くにある転石浜のあちこちから多くのコウダカアオガイを採集し、軟体部を取り除いて殻の色と模様を比較してみた。殻表の変異は、すでに経験していたとおり、暗緑色の放射筋のあるもの、暗緑色や褐色、黒色の斑点やかすり模様のあるものなど、多様であった。殻の内面は、図鑑の記載にある乳青色(正常型)が多かったが、なかにアオガイ特有の褐色斑紋と違う、輪郭の不明瞭な褐色部を持つものや、あの中学生が研究室に持ち込んだ濃褐色一色のもの(褐色型)も混じっていた。

正常型と褐色型が採れた場所を調べてみると、この転石浜に流れ込んでいる小川の河口と海岸に沿った潮の流れに依存した、はっきりした変異の勾配が認められた。つまり、淡水の影響の最も大きい河口に濃褐色のものが住み、淡水の影響が次第に薄められるにつれて正常型である乳青色が現われてくる傾向が認められたのである。移動力の小さなこの種の貝は、周囲の水質によって大きな影響を受ける場合が多い。

コウダカアオガイの殻の内面の色の違いは、淡水の混入による海水の塩分濃度の差による環境変異であった。このことは、比較的狭い範囲の海岸から、200個を越える標本を採集することによって、初めて明らかにされたし、実験所に保存されていた同種の標本を検査することで、更に確認された。

似たような事例はきわめて多い。アサリやウチムラサキのような砂地にすむ二枚貝でも、内面の色の違いがみられる。これらは、すんでいる深さや食物の多少と関係した変異といわれている。また、直射日光の多少で殻表の色が変化するイガイ、波当りの強弱で殻の形が変化するマガキ、オオヘビガイ、ヨメガカサ、潮の流れの強弱で刺が出たり出なかつたりするサザエなど、いずれも環境変異の例としてよく知られたものである。

俗に「十人十色」といわれる個体変異は、海岸にすむ動物でも数多く認められる。アサリやヒメアサリ、タマキガイ、エゾチヂミボラなど、多くの貝類の殻表の色や模様に個体ごとの変異がみられる。亜潮間帯に多く、転石海岸でもよく見かけるイトマキヒトデの腕の数は、ふつう5本であるが、1,200個体ほどを採集して調べたとこ

ろ、4本腕と7本腕のものが各1個体、6本腕のものは5本腕 100個体に対し1個体ぐらゐの割合いで認められた。

同じ種類の動物や植物を数多く採集するのは、無駄な殺りくだという批判を受けることがある。しかし、研究の目的によっては、できるだけ多くの個体を広い範囲から集めなければならない場合もある。要は、それがどのような目的でなされ、どのように活用されるかという認識をふまえているかどうかであろう。

博物館にとって、「もの」はすべての活動の中心に位置するものである。とりわけ、自然史系の博物館では、動植物、および化石、岩石、鉱物等の標本は、研究の重要な証拠物件として集められ、保存されなければならない。個々の標本自体はふつうのものであっても、ある目的にそって数多く収集保存されることによって、絶対的な価値を生ずることもある。単独で価値の高い資料や、珍奇な資料のみが尊重されるべきではない。個から群へ、珍奇なものから普遍的なものへという収集の方向こそが、研究を主目的とする大学の附属博物館や、地方の博物館の目指すべき方向ではなからうか。

(教育学部・助教授)

お知らせ

1. 特別展「生活とエネルギー」について

本館では、昭和56年度の特別展のテーマを「生活とエネルギー」と決め、現在具体的な計画を検討中である。

一、期 日／昭和56年11月6日(金)～21日(土)・10日間

二、会 場／中央図書館会議室及び博物館展示室

三、展示目的／エネルギー問題は、昭和48年(1973)第一次オイルショック以来、私たちの暮らしの上に、重くのかかってきて、経済生活に非常な影響を及ぼしている。こうして、地域エネルギーの開発利用、代替エネルギーの活用、省エネルギー等の問題が急速に浮上してきた。これらの問題について、現在、山形大学では、どのように研究を進めているか、また、このような学術的成果を、企業では、どこまで実用化して生活に役立たせているか等についての資料の一部を、展示・公開することによって、この問題についての関心を深めようとするものである。

四、主な展示内容

ア、模型

- ①燃料電池 ②スターリング・エンジン ③風車模型
④自動車積載風車試験装置 ⑤家屋の断熱効果模型
⑥地下水熱源ヒートポンプシステムの模型
⑦コレクター ⑧ガラス製のヒートパイプ ⑨融雪用アンモニア鉄管パイプ ⑩濃度差エンジン模型

イ、パネル

- ①1090m実揚程試験 ②核融合開発の意義 ③核融合開発の現状 ④主要先進国の石油輸入依存度 ⑤主要先進国のエネルギー供給構造 ⑥日本のエネルギー消費の変化、その他多数

ウ、その他

- ①省エネルギーの変遷に関する資料
②地域エネルギー開発利用調査に関する資料(図表・写真等) ③エマルジョン燃料による自動車走行テスト結果。

以上のような資料を展示します。

なお、この特別展と平行して「生活とエネルギー」というテーマに関係の深い理・工・農の各学部、及び歴史科学、生活科学等、諸分野の教官が、研究成果を講義の形式で市民に公開し、この問題に関する多面的な知識を提供するために、下記のとおり、公開講座を開講します。

一、名 称／昭和56年度山形大学公開講座「生活とエネルギー」

二、会 場／山形大学

三、期 間／昭和56年9月12日(土)から昭和56年11月7日(土)まで計8回。10/10の祝日を除く毎週土曜日午後1時から5時まで(ただし、第1回目と第8回目は5時30分まで)

四、受講者の種類・人員／一般市民 100名

五、講座科目及び講師

氏 名	学 部	官職名	演 題
広根徳太郎		学長	原子力をめぐる2・3の問題
宍戸 直	人文学部	教授	西洋美術におけるエネルギー表現
横山 昭男	教育学部	"	日本における燃料の歴史
金子 幸子	"	"	民家の住居気候と省エネルギー
麻木 脩平	"	講師	日本仏教美術における自然エネルギーの神格化
今田 正	理学部	教授	火山現象に伴うエネルギー
安部 守	"	助教授	生物のエネルギー代謝
浅野 和俊	工学部	教授	自然エネルギーと電気
梅宮 弘道	"	助教授	地下水層を用いた熱の蓄積利用
安江 保民	農学部	教授	木質エネルギー
山形 理	教養部	"	エネルギーとしての石炭
浜谷 正人	"	助教授	エネルギーの生産と流通
安濃 恒友		名誉教授	資源エネルギー問題に対してのローカルエネルギーの立場からの対策

2. 学芸員資格取得のための博物館実務実習について

本年度の実務実習の希望者数は下記(表)のとおりである。

学 部	希 望 者 数	合 計
人文学部	29人	76人
教育学部	16	
理 学 部	31	

昭和56年7月20日から24日までと、同じく27日から31日までの各5日間の2回に分けて実施する。

資 料 紹 介

紅 花 資 料

中 沢 勝 麿

紅花は江戸時代、山形だけの特産ではなかったが、山形産のものは、量質ともにすぐれ、「最上紅花」と言われ京都、大阪、江戸に出荷され、特に関西では、阿波の「藍」と並んで、染色界の注目をあび、玉虫色に輝く優雅な「小町紅」は、化粧用として京美人の唇を、あでやかに彩った。

山形県で紅花が栽培されるようになったのは、十七世紀江戸時代初め頃からで、漆、桑、青芋などと共に栽培されていたが、江戸の中・後期になると、最上川中流々域の山形盆地（村山地方、昔の最上地方）が栽培の中心地となった。それは、最上川流域の肥沃な土地、開花期に適当な雨が降ること、また、摘花期に朝霧がかかる地域と言う、自然条件に恵まれていたことが、その理由の一つとされている。最上紅花の生産高が多かったのは、十八世紀末の寛政期から、十九世紀の幕末にかけてで、紅花の年産概数は「最上千駄」と言われた。江戸期の全国紅花生産額は、年産約二千駄と記録されているから、山形県では、全国紅花の約半数量を、村山地方から出荷していたことになる。

紅花は、昔から干花は染料、薬用、着色剤、化粧用、種子は食料、燈用、紅花墨に利用され、最近では、種子から製する紅花油が、医薬用、塗料の溶媒剤として、大量に用いられるようになった。

さて、当館で収集し、展示している紅花資料は、殆んど、本大学工学部・応用化学科、馬場肇技官の提供によるもので、馬場肇先生は、大学の実験室で学生の指導に当たりながら、ベニ色素の構造の研究に取組み、42年暮、今まで水に溶けないと言われていたベニを、水に溶かす技法を完成し特許を得ている。水溶性ベニは、水彩絵具と同じように利用され、織物の手がき染めをはじめ、各種の染料にも手軽に使えらる。

以下は本館の展示資料である。

1. 紅花（ドライフラワー）
2. 紅花種子
3. 干紅花

a. 乱花 摘み取った花を、そのまま速やかに、天日で乾燥したもので、主に漢方薬として薬用に供されるが、これから泥状紅を製したり、また、黄色素を大量（約

30%）を含むため染用としても用いる。

b. 紅餅（花餅とも言う） 干紅花の代表的なもので、昔はその製法については、ベニの製法とともに、秘伝とされていたが、現在は、殆んど一般には行われていない。

その製法は、先ず生花を水洗してから、水を少し加えてよくもみ、水溶性の黄色色素をしばらく取り、一定の温度と湿度で自然発酵させた後、よく粘り合わせ、小判状にして直射日光で乾燥したもの。薬用、口紅の原料に用いられる。

c. 摺花 黄色素及び水分を除去したあと、乱花同様に、新聞紙などにひろげて、速やかに乾燥したもので、空気中の酸素によって紅花の中に含まれている色素が紅色となるのである。現在、山形県内では、この方法で処理されている。染料・着色剤などに用いられている。

4. 紅花油 紅花の種子から製するもの。紅花油の中には、人間の体内では作られない、リノール酸（ビタミンF）が75%以上も含まれ、この中に、トコフェロール（ビタミンE）が溶け込んでいるので、成人病の予防や治療に役立つと、栄養学や医学雑誌に報告されている。

5. 小町紅 盃に塗った口紅。化粧用に使う。

6. 紅花染織物

- a. 長井紬織の倫子 一反
- b. 風呂敷 一枚
- c. ハンカチーフ 二枚

7. 写真

- a. 紅花畑風景 一枚
- b. 紅花摘風景 一枚
- c. 花餅作り風景 三枚

昭和55年度見学者総数

一 成 般 人	個人	6 3 1 (人)
	団体	5 0
大 学 生	個人	4 8 8
	団体	1 6 9
児 生 童 徒	個人	2 0
	団体	1 1 2
合 計	個人	1, 1 3 9
	団体	3 3 1
	総数	1, 4 7 0

山形大学附属博物館報 No. 8
1981. 7. 1 発行
編集兼発行人 山形大学附属博物館
(〒990) 山形市小白川町1丁目4-12